

国際教室あるある事例集・考える素材リスト（2018年7月6日 県教員研修）

NO	項目	国際教室あるある	工夫や配慮をして対応した例
1	就学時	制服、ジャージ、靴、学用品などがすぐに揃わない	ランドセルを学校で貸すことはあるが、学用品は買ってもらうように説得する。リストだけでなく、実物を見せたり売っている店も説明する。制服を卒業生から譲ってもらいストックし、支援団体を通じて渡す。
2	就学時	急に入学するとなったり、キャンセルになったり	教育委員会や学校で就学申し込みをする際に通訳を付けたり母語での説明資料を使い費用やルールなどをしっかり伝える。小中学校に通う前にプレスクールで日本語初期指導をしたり学校生活のことを教える。子の在留資格を確認（定住、永住、家族滞在、観光、ビザなし）
3	就学時	名前が長く、どのように表記、呼称するか戸惑う	通称を親に確認し、カタカナ表記にする。
4	就学時	送迎が当たり前の国から来た場合、登校班の説明が難しい 学区外に住んでいるケースもある	子どもだけで通学することを心配する保護者もいるので、登校班の目的や地域の見守りのことも説明し登校班に入るか確認し、入る場合は住所をどの班に入れるか決める。親が送迎する場合は車を置く場所などを説明
5	就学時	給食や掃除がない国から来た場合に、給食係等の説明に戸惑うことがある	母国の学校では経験していないこともあるので、親に日本の学校のやり方を説明し子どもに一つ一つ教える。
6	就学時	ピアスはダメと言ったら親がものすごくショックを受けた	ファッションではなく、親子の絆として生後すぐにピアスをするなど、国による風習にも理解をした上で、学校のルールを丁寧に説明して納得してもらう。
7	生活	親の出勤の都合で朝7時くらいに学校に子どもを送ってくることもある	親に登校時間を知らせつつ、どうしても朝早くになる場合は門外で待たせるよりは居場所を作る。
8	生活	給食の野菜が食べられない子、牛乳が飲めない子、偏食がすごい子がいる	食習慣が異なることもある。炭酸飲料は好きだが麦茶は飲めない子もいる。保護者に家では何を食べているか確認したりして、徐々に食べられるように促し、食べられたら励ます。野菜を食べずスナック菓子を好む子は便秘から体調不調になりやすいので、保健の先生と協力して水分補給、運動を増やすなど体質改善を促す。
9	生活	宗教的に給食のおかずが食べられない子がいる（ハラールでない）	給食の材料、調味料に酒が含まれているかなどわかるように説明し、食べられるものが少ない場合は自宅から弁当を持ってきてもらう。食べられる献立が増えるよう給食担当と相談する。
10	生活	保護者向けのプリントが親に渡っていなかったり、渡っても理解されず、忘れ物や提出物の未提出が多い	モノの名前だけでは理解できない場合は絵や写真を付ける。必ず持ってきてほしいことが書かれているお知らせに「重要」（前もって説明）スタンプを押し強調する。
11	生活	親の仕事からの帰りが遅く、睡眠不足だったり生活リズムができていない子がいる	親の就労環境を理解しつつ、睡眠不足が子どもの教育に影響していることを伝え、早寝早起きの習慣を作るよう保護者に伝える。
12	生活	雨が降ると休む子が多い	出身国ではそれが普通、という感覚の違いを理解しつつ、日本の学校のルールや休むことのデメリットを保護者に伝える。
13	生活	子どもの喧嘩の時に、親を呼んで説明しても被害者意識が強く学校に不信感を持たれることがある	「外国の子はいじめられる」という噂が流れていたり、子どもが一部を隠して親に伝えることもある。学校での様子や何が起きたのかを正しく伝え（できるだけ通訳を依頼）学校との信頼関係を損なわないようにする。
14	行事	修学旅行に参加しない子が多い	イメージがない親子に行事の目的や何をするのかわかるように写真などを見せて伝える。就学援助や積立のことを丁寧に伝える。皆でお風呂に入ることに抵抗感がある場合は一人で入浴できるよう配慮する。
15	行事	運動会が授業の一環であることが理解されず、お昼で家族と帰る子がいる	運動会に慣れていない保護者のために、駐車場、場所取り、ゴミの持ち帰り、スケジュールなどを翻訳するなどしてわかりやすく伝える。外国ルーツの子が母国語でアナウンスをすると家族にも伝わりやすい。
16	行事	引きわかし訓練にも仕事で家族が参加しにくい	家族が少ない家庭、車がない家庭もあるのでクラブが一緒とか登校班が同じ子の保護者に迎えを頼むことも含め災害時対応については特に留意して子どもにも親にも伝える。一斉メールで保護者に知らせる場合、外国人世帯にも伝わるよう登録を促す。国際学級で避難所や災害の事を取り上げることもできる。

17	行事	授業参観や親子の集いに親が来られず子が落ち込むことがある	外国ルーツの子も活躍できる授業内容を心がけ、子どもから「絶対来て」と頼む。派遣会社の社員が授業参観を経験したことがない場合もある。学校から会社に配慮を呼びかけたことで有給が取りやすくなったケースもある
18	行事	PTA役員になっていても殆ど参加しない	入学時などにPTAの各係がすることを伝える。学校に関わりたいと思っている外国人保護者に学年会長などを委嘱したり、PTA本部役員とは別に外国人保護者のまとめ役になる人を委嘱する例もある。外国人保護者懇談会を保護者が参加しやすい時間や内容で企画（バーベキューなど）することでキーパーソンが見つかることもある。
19	指導	高学年の子に低学年の教材で教えようとする意欲が下がる	子どもにプライドがあり、同学年の子と同じ教科書で勉強したいという思いに配慮する。基礎から勉強しつつも、同学年の教科書を素材にして国際学級で予習をすることで、在籍学級の授業がわかるようになり、手を上げて答えられたことで自信を回復し意欲が高まることもある。
20	指導	帰国が近づくと学習意欲が落ちやすい	帰国する場合でも、英語や日本のこと（言葉や礼儀、地名、文化など）を知っておくと、それが役に立つこともある。帰国後日系企業に就職したり通訳になったりするケースもあること、などを伝え励ます。
21	指導	頑張っても在籍学級で受けていない科目で成績がつかなかったり1だったりで意欲が落ちる	国際教室でも漢字や算数の進級表を作成しその達成度に合わせて表彰したり、国際教室としての通知表を作るなどして本人や親に成長が実感できるようにしている例がある。（それらがないと国際のイメージが下がる）
22	指導	母国で何年間、どこまで学んできたかがよく分からない	国によって九九を習う学年が異なっていることもある。親から情報を得たり、四則計算の理解度などを確認してどこから積み上げるか教科担当の教員と相談しながらカリキュラムを作る。
23	指導	「日本語指導が必要」の判断基準で迷う	学校としての物差しが必要。会話ができるということと、問題文や説明を理解するための学習言語が身につくことは別のこと、と考え、どこまで理解できているか確認することが大切
24	指導	一人ひとりに合った教材をどう用意すればいいか迷う	日本語初期指導、漢字や算数学習の段階に応じたプリント集を教室に蓄積する。周辺の学校で教材について情報交換をしたり、文科省の「かすたねっと」 https://casta-net.mext.go.jp/ で検索しダウンロードもできる。
25	進路	親の職業が限定されがちで仕事のイメージが狭い	工場以外にも様々な職場、職種があること、仕事には必要な資格があり、資格を得るための専門学校や試験があることを教えるキャリア教育をNPOなどと連携して行う。外国ルーツの先輩の体験談などは刺激になりやすい。職場見学、中学校や高校の見学も重要。キャリア教育の資料は
26	進路	中学や高校など将来のことをあまり考えていない子がいる	https://www.commonsglobalcenter.org/
27	進路	中学校に入る時に試験があるという噂が流れ親が心配している	外国人児童生徒と保護者向けの進路ガイダンスを教育委員会、学校、NPOなどが連携して行う。義務教育の仕組みも高等教育の仕組みも国により異なるので、日本の教育システム、特に公立と私立、全日制と定時制、入学のための諸費用や奨学金、どこにどんな高校があるか、などの情報を伝える。子の学力で入れそうな高校、外国人特例選抜の対象になるか、志望校選択までのスケジュールや面談の重要性も早めに伝える。
28	進路	高校入試に関する情報が生徒にも親にも不足していて志望校選択や受験準備が遅れやすい	
29	進路	入国3年以内の中学生が県立高校受検の際に外国人特例選抜を受けた方がいいか迷うことがある	外国人特例選抜は入国3年以内であれば3教科（国、数、英）と面接で受検できる。ただし高校の選抜枠が2名など小さい場合は倍率が高くなる場合もあり、その場合は5教科受検を選択することが多い。地域の中学校と高校の間で特例選抜の希望者数について情報共有を図ることが重要
30	不登校	中学校に入る時のギャップで不登校になりやすい	環境が大きく変わり、友人と離れたりとすると大人しい子は孤立しやすい。学習内容も急に難しくついていけなくなりそれが意欲低下につながることもある。教員、クラスメイトなど相談できる人がいるように気配りをする。数学を国際教室で行う場合、小学校でどこまで勉強してきたかを把握することは大切
31	不登校	部活に入らなかったり、入ってもやめてしまう子が多い	本当はスポーツがしたいが、費用がかかったり、保護者が練習や試合の送迎ができないことがネックになることもある。

32	不登校	兄弟姉妹の世話をするため学校に来られない子がいる	家族を支えなければいけないなどの事情を理解しつつも、この時期の学び、学校を卒業することが日本で生きていく上で大切であることを本人や保護者に伝え、事情に配慮しつつ学校に通ったり、卒業できるよう支援する。進学をあきらめる場合は、就職、子育て、福祉に関する官民の相談機関や定時制や通信制高校の情報を伝える。
33	不登校	中学生の年代で仕事をしていたり妊娠出産する子もいる	
34	教員	国際学級の担任の異動が多い	毎年、ゼロから指導を始めなくてもいいように、教材やカリキュラムを蓄積すること、地域で継続的に子どもや家族に関わっているNPOやボランティアがいる場合は、そこと学校がつながると困った時に連携しやすい。学校の管理職がリーダーシップをとり学校全体で日本語が話せない子ではなく特別な配慮が必要な子としてサポートする体制を作り、国際学級の教員だけで抱え込むことがないようにすることが重要。空き時間のある教員も協力したり地域のボランティアを見つけるなどすることで、加配教員がいない場合でも支援体制を作って取り出し授業をすることはできる。
35	教員	予定していないコマでも在籍学級から国際学級に送られてきて対応に困る	
36	教員	外国人児童生徒の担当教員向けの研修機会が少ない	常総市では市教委とNPOが連携して年数回、外国人生徒が多い小中高校の関係者が集まり情報交換会や研修を行っている。
37	教員	在籍学級での様子や教えている内容がよく分からない	国際学級の教員と在籍学級の担任がそれぞれの教室での様子や学んでいること、行事の予定、保護者とのやりとりの状況、仲のいい友達などの情報を共有する。在籍学級で行うことの予習や準備を国際学級で行うことで子どもが在籍学級の授業に積極的に関わられるようになることもある。
38	組織	支援員（通訳）がいるのにお知らせの翻訳をしていない	子どもの状況や保護者のニーズを踏まえて、限られた時間しか契約していない支援員が、翻訳、教室での付き添い、保護者への連絡などをどの時間帯にどれくらい行うか目安を作ったり、支援員がどこまで自分で考えて動いていかを明確にしないと指示待ちの状態ではその存在が活かされない。母語で話せる支援員は子どもや保護者の気持ちを受け止め、教員、学校とつなぐ役割も担える。学校全体で、特別な配慮が必要な子をケアするチーム（担任、学年主任、生徒指導、進路指導など）を作り、そのチームの一員として位置付け、話し合いに同席できるようにすることで、子どもや保護者とのコミュニケーションが改善することがある。学校に通訳は配置されていなかったり、母語が異なる場合、地域のNPOや国際交流団体などを通じて通訳を探すこともできる。
39	組織	支援員の役割が明確でなく、どこまで子どもに関わっていいか迷う、どこまで頼んでいいか迷う	
40	組織	支援員の勤務時間が短く、放課後や夜間対応はボランティア状態	
41	組織	支援員は教員ではなく契約外の休日のイベントに出られないが子どもからは来てと言われ困っている	
42	保護者	発達の遅れや障害が気になる子もいるが親にどう説明すればいいか迷う	学校内でも特別支援担当や担任が連携して学校での様子を把握記録し、保護者に学校での様子を知らせたり見に来てもらう。保護者自身が希望する場合は特別支援学校の相談員につないだり、放課後デイサービスなど児童福祉サービスの情報などを提供することもできる。外国の子を受け入れている事業者には、専門の医療機関の受診、児童相談所の判定、市役所での手続きや通訳の手配をサポートしてくれるところもある。
43	保護者	親が日本語のお知らせやお便りを読めない	翻訳したり、ふりがなを付けたり、「やさしい日本語」の書き方に沿ってお知らせを作成する。日本語がわかる外国人保護者や地域の団体に大事なお知らせの翻訳を頼んでいる例もある。書類が多すぎるとどれも見ないことになりやすいので、これだけは見て欲しいという文書がわかるように工夫する。（色を変える、スタンプなど）
44	保護者	在籍学級では授業に参加できないので、国際学級に通うことを勧めたいが、悪いイメージを持たれていて親が同意せず困ることがある	落第していないから勉強できていると思っていたり、国際に入ると他の子より遅れてしまうことを心配する保護者もいる（噂の影響も受けやすい）ので、在籍学級での子の様子や国際学級での段階的な学習カリキュラムを見てもらうことができる。日本語や基礎ができていないと高学年や中学の時に苦労することを伝える。在籍学級でもその子が活躍できる機会を作り、日本の子どもとの関係が育ってきていることを親に伝えるなどして不安を取り除くように、担任と国際学級の教員、通訳が協力して説明し理解を得ることができる。
45	保護者	落第がない国から来た保護者は進級しているので学力があると勘違いしていることがある	

46	保護者	子どもが具合が悪くても仕事中は迎えに来られないケースがある	緊急の場合には学校から保護者に連絡できるよう会社に協力を依頼したり、電話がつながる休み時間や、代わりに電話を受けてくれる知人を聞いておく。健康保険に入っていないなど、医療費負担が大きくなる世帯もあるので健康保険の加入状況は把握しておいたほうが無難。宗教によっては輸血が禁じられている場合、同性でないといけない場合もある。日本語能力だけの問題ではなく文化や価値観の違いにも配慮が必要。
47	保護者	怪我をした時に親と連絡が取れず病院に連れて行ったらお金を払えないと言われた	
48	保護者	費用徴収について何度説明しても払わない親がいる	文書が読めなかったり、「何のために払うのか、払わないとどうなるか」が伝わっていないこともあるのでわかるように説明する。家計が厳しくて払えない場合は分納、一部減免をしたり、自治体の生活困窮者支援窓口などと連携することもできる。経済困難を抱えている外国人家庭では、家族内でドラブルが起きていたり、病気の人がいるなど子どもへの負担が大きくなっている場合もある。民生委員や福祉関係者と連携して孤立した状態を改善することが子どもが不登校になるリスクを減らすことにもつながる。
49	保護者	保護者面談や家庭訪問で通訳が見つからず困ることがある	NPOや国際交流団体で通訳を探したり、保護者に日本語がわかる人（兄弟や親戚など）の同席を頼むと兄弟姉妹が通訳することがある。対象となる子が通訳をするのは正しく親に通訳しなかったり、家庭問題の話では子の心が傷つくこともあるので児童生徒に通訳を頼むことは避けたほうがいい。